

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00869

研究課題名(和文) Motivational change during university and its impact on growth in English proficiency

研究課題名(英文) Motivational change during university and its impact on growth in English proficiency

研究代表者

Leeming IanPaul (Leeming, IanPaul)

近畿大学・経済学部・教授

研究者番号：60646173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究プロジェクトは非常に実り多いもので、目標を達成することができた。まず、私たちはアンケートを作成し、学生グループに試用させた。このアンケートを用いて、大学生約600名のモチベーションを測定した。アンケートは1学年の間に3回実施し、同じ学生を2年間追跡することができた。また、語学力の測定も行い、2年間で8人の学生にインタビューを行うことができた。このインタビューによって、生徒のモチベーションについてさらなる洞察を得ることができた。私たちはいくつかの国際会議で研究結果を発表し、私たちの専門分野の高いレベルの学術誌に2本の論文を発表することができた。また、3本目の論文は学術誌に投稿済みである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Through our research we showed that in order to increase the motivation and therefore proficiency of students, teachers need to ensure that classroom activities are intrinsically motivating, and also provide students with experiences of success. This provides clear guidance for teachers.

研究成果の概要(英文)：This research project was very fruitful and we were able to achieve the goals. First, we developed a questionnaire and piloted it with a group of students, and then we modified it and conducted our main study. We used the questionnaire to measure the motivation of approximately 600 Japanese university students. The questionnaire was administered three times over the course of an academic year, and we were able to give the questionnaire to the same cohort of students for two years. We also measured their language proficiency, and we were able to interview eight students multiple times over the course of two years. These interviews gave further insights into the motivation of students.

Having gathered the data, we presented the results of our study at several international conferences and have been able to publish two papers in high-level academic journals within our field. We also have a third paper which has been submitted to a journal for consideration.

研究分野：Language learning motivation

キーワード：motivation language learning longitudinal

1. 研究開始当初の背景

世界中の学生が外国語としての英語を学び、成功を収める者もいれば、基本的なコミュニケーション能力を身につけるのに苦労する者も多い。最終的な習熟度の差には個人差もあるが、モチベーションが最も重要な要因であることは広く認められている。

やる気のある学生は、教室という枠にとらわれず英語を使う機会を求め、言語を習得するために必要な時間を費やす。Apple, De Silva and Neff (2013)は、日本における英語学習のモチベーションについて調査した本を出版している。しかし、収集され議論されたデータは、横断的なものであるか、少数の参加者を対象としたものである。または少数の参加者を対象としたものであり、その性質は定性的なものである。自己決定理論 (SDT) (Ryan & Deci, 2017) は、モチベーションを研究するための確立されたフレームワークでモチベーションあり、言語学習の文脈で使用されることが多くなっている。

最近、SDT は日本の学校で英語を学ぶ小学生のモチベーションの変化を研究するために適用された (Olga-Baldwin et al. 2017)。その結果、意欲的な学生ほど教材に取り組み、より高いレベルで学習できることが示された。小学校から高校までの英語学習も無論重要ではあるが、この教科の集大成となるのは、大学の1、2年生である。

2. 研究の目的

今回の研究では、必修科目としての英語教育の、最後の2年間における大学生のモチベーションの変化を測定することを目的とした。モチベーションの変化を測定すると同時に、言語能力の伸びも追跡した。モチベーションの変化とそれが習熟度の向上に与える影響は、教師や研究者にとって興味深いものであるが、その変化を理解する試みも重要である。この研究では、モチベーションに関するアンケートから得られた質的データを用いて、(a)モチベーションが低下した学生、(b)変化しなかった学生、(c)上昇した学生の3つのグループに分類した。各グループの学生にインタビューを行い、モチベーションの変化の原因を調査した。言語習得の成功に不可欠な要素である、学生のモチベーションの変化の要因をより深く理解することで、これの向上を教師が促進できると期待できる。研究の最終的な目的は、学生が自己申告したモチベーションと、教師が教室で報告した学生の授業中のモチベーションを比較することによって、モチベーションの尺度の信頼性を確立することである。

今回の研究では、3つのリサーチクエスチョンの答えを追究。

(1) 大学での英語の必修授業の2年間で、学習に関するモチベーションはどのように変化するか。

(2) モチベーションは同期間の言語能力の変化にどのように影響するか。

(3) この2年間における学生のモチベーションの変化には、具体的にどのような要因が影響しているのか。

1つ目と2つ目の研究課題は、入学時、1年次後期、そして2年次後期のモチベーションと英語能力のレベルの測定値を基に考察した。これにより、モチベーションと習熟度の両方の成長を統計的にモデル化することができた。

3. 研究の方法

2019-2020

プロジェクトの初年度、我々は自己決定理論の枠組みを通して学生のモチベーションを測定するための質問票を開発し、予備的に実施した。約600人の学生に2種類のアンケートに回答していただき、その結果をラッシュ分析で分析した。その結果に基づいて、アンケートを修正し、効果的な測定ができるようにした。また、パイロット・スタディに基づいた最初の論文を執筆し、より高度なレベルの国際的な査読付き学術誌に掲載することができた (Language Learning DOI: <https://doi.org/10.1111/lang.12496>)。初年度の終わりには、研究責任者が東京の学会で研究結果を発表することができた。

2020-2021

残念ながら、研究プロジェクトの2年目にコロナウイルスの感染拡大のため、その年のモチベーションに関するデータ収集計画を断念せざるを得なかった。しかし、研究プロジェクトに関連する論文の執筆や、次年度のデータ収集の準備は継続した。

2021-2022

我々は約600人の学生に改訂したアンケートを配布した。学生たちはアンケートに回答し、英語能力の測定も行った。そしてこのデータを分析し、2019-2020年に予備的に実施したオリジナル

版と比較した。その結果、アンケートの信頼性が全般的に向上していることがわかり、2つの研究の結果を比較した論文を執筆した。これは『Research Methods in Language Learning』という国際的な査読付き学術誌に掲載された (DOI: 10.1016/j.rmal.2024.100096)。

2022-2023

我々は研究のための主要なデータを収集した。4月、9月、1月に大学1年生を対象としたモチベーションに関するアンケートを実施した。また、8月と1月に8人の学生を対象に追加インタビューを行い、一年を通じたモチベーションの変化についてより深い洞察を得た。我々は、研究の理論的側面に関する論文を調査付きの国際誌『Task』に掲載した (DOI: 10.1075/task.21024.lee)。また、2022年から2023年にかけて収集したデータの分析も開始した。

2023-2024

我々は、論文発表のためのデータをより多く収集し、分析することができた。開発したモチベーションに関するアンケートを3回実施した。また、学生とのインタビューを実施し、リサーチ・アシスタントがその内容を文字化した。我々は韓国で開催された国際学会で発表し、論文発表に役立つ有益なフィードバックを得ることができた。また、シンガポールで開催された国際言語学会でも研究結果を発表した。

また、最終的なアンケートをオープンアクセスとして他の研究者に提供し、この分野での今後の研究に役立ててもらえるようにした。そして、1年間の学生のモチベーションの経時的変化を記述した論文が国際ジャーナルに提出しました (結果未定)。現在準備中の最終論文では、2年間にわたって収集した縦断的データを用いて、モチベーションの変化を示したいと考えている。この最終論文では、2年間にわたって8人の学生に複数回実施したインタビューの分析結果も発表する予定である。

4. 研究成果

この研究プロジェクトの結果は非常に有益だった。最初に、自己決定理論の枠組みを利用して、学生のモチベーションを測定できるアンケートを効果的に開発した。このアンケートは公開され、他の研究者がそれぞれの研究で使用できるようになっている。我々は、これが他の研究者にとって有益であると考えている。

モチベーションには、外発的モチベーションから内発的モチベーションまでの尺度がある。最初のリサーチ・クエスチョンに関しては、モチベーションの成長は複雑であり、伸びた項目のモチベーションも、目立った変化が見られなかった項目のモチベーションも存在することがわかった。

自己決定理論は、人間が心理的にうまく機能するには、3つの重要な要素が満たされる必要があるとしている。その3つの要素とは、「自律性」、「有能性」、「関係性」です。これらの要素が満たされていれば、人間は意欲的になりやすくなります。したがって、教師は学生のこれらの要因を伸ばすように努めることが重要です。

本研究の学生の、有能性 (能力) と関係性 (関連性) は、1年間を通じて著しい成長を示した。これは非常に前向きな発見である。また、統合的モチベーションと外発的モチベーションの両方の増加が確認できた。

第二の研究課題に関しては、有能性と内発的モチベーションが、TOEIC のリスニング・リーディング・テストで測定される英語能力の唯一の有意な予測因子であった。このことは教師にとって非常に重要である。学生はしばしば、自分は英語が話せないと感じ、否定的な態度をとるが、教師は、学生が達成感を味わえるような肯定的な授業体験を提供することで、有能性を育むことが重要である。シンプルで達成可能な課題を課し、徐々に難しい課題へとシフトしていくことで、有能感を育むことができる。また、内発的動機づけを育てるためには、教師が学生の興味を引くような課題を課すことが重要である。また、内発的モチベーションを育てるためには、教師が学生の興味を引くような課題を使うことが不可欠である。もし学生が興味を持たなければ、課題に取り組む可能性は低くなると考えられ、英語に対する興味は英語能力を伸ばす上で非常に重要であると思われる。学生が興味を持つトピックを見つけることで、教師は内発的に興味を持たせるような教材を開発することを試みるべきである。

モチベーションに影響を与える要因についての最後のリサーチ・クエスチョンに関しては、インタビューから、いくつかの重要な要因があることが推測される。学生たちはクラスメートから受けた影響についてコメントした。学生らが英語を勉強することに興味を持っていると認識したとき、周囲の人々がモチベーションの源となることが示唆された。また、TOEIC テストの影響も挙げられており、TOEIC テストは上達の度合いを示してくれたり、クラスメートと比較して自分がどの程度上達しているかを把握するのに役立ったりするとのことであった。インタビューの結果は、出版用にまとめる予定である。

今後の方針

今回の結果は、大学1、2年における、必修科目としての英語を履修する日本人学生のモチベーションを理解する上で、示唆に富むものであったと考えている。今後の研究としては、モチベ

シヨンの変化に影響を与える可能性のある教師の具体的な行動について調査し、教師が自身の授業において学生のモチベーションを向上させるための具体的な示唆を提供したいと考えている。教師は学生の成功に大きな役割を担っているため、特に学生の英語学習に対するモチベーションを向上させるという分野において、教師の手助けになるような研究をしたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Paul Leeming and Justin Harris	4. 巻 72
2. 論文標題 Measuring Foreign Language Students' Self-Determination: A Rasch Validation Study	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Language Learning	6. 最初と最後の頁 646 ~ 694
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/lang.12496	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Paul Leeming and Justin Harris	4. 巻 2
2. 論文標題 Self-Determination theory and tasks A motivational framework for TBLT research	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Task	6. 最初と最後の頁 164 ~ 183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1075/task.21024.lee	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Leeming Paul, Harris Justin	4. 巻 3
2. 論文標題 The language learning orientations scale and language learners' motivation in Japan: A partial replication study	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Research Methods in Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 100096 ~ 100096
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.rmal.2024.100096	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Ian Paul Leeming & Justin Harris
2. 発表標題 SELF-DETERMINATION THEORY AND LANGUAGE LEARNING: REFINING THE MEASUREMENT OF MOTIVATION
3. 学会等名 2023 Joint International Conference on ELT in Korea (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 J. Harris
2. 発表標題 The development of language learner motivation in Japan: A self-determination theory perspective
3. 学会等名 2024 RELC Conference (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Ian Paul Leeming
2. 発表標題 Self-Determination Theory and Motivation in TBL
3. 学会等名 TUJ Applied Linguistic Colloquim 2020
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	ハリス ジャスティン (Harris Justin) (70613199)	近畿大学・経済学部・教授 (34419)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------